

春暁しゅんぎょう
(孟浩然もうこうねん)

春眠不覺曉 處處聞啼鳥
夜來風雨聲 花落知多少

春眠しゅんみん 曉あかつきを 覺おぼえず

解説 のどかな春の朝の景を詠じ、幽人である作者の長閑のどかにして満ち足りた境地を詠った詩。

処々しよしよ 啼鳥ていちようを 聞きく

語釈 ※春眠||春のここちよい眠り。※不覺曉||朝になったのに気がつかない。※処処||あちらこちら。いたるところ。※聞||きこえる。※啼鳥||鳥の啼く声。※夜来||昨夜。※知多少||どれほどかわからない。

夜來やらい 風雨ふううの 声こえ

通釈 春の眠りはここちよく、うつらうつらと夜の明けたのも気づかず
に寝ている。外ではあちこちに鳥の鳴く声が聞こえる。夕べは風雨の音
がしていたが、庭の花はどれほど散ったことやら。

花はな 落おつること 知しんぬ 多た少しよぞ